

人を含む動物にとって「移動能力」の水準は、生活・生存自体の水準を定める重要な基本要因であることは周知のごとくである。ICF に準じて端的に考えると、患者の「心身機能・構造」を最大限度に回復させ、それらを「活動」と「参加」に反映させることである。しかし、それらの過程はたいへん複雑であり、なかなか理論的には進まないことが多い。そのような過程で EBM の視点で種々の角度から clinical reasoning を行い、ICF に準じた「脳卒中片麻痺患者の歩行」に関連する理学療法について考える機会になれば幸いである。

■脳卒中片麻痺患者の歩行能力改善の推移(丹羽義明, 他論文)

脳卒中片麻痺の発症後からの歩行推移と歩行獲得に影響を与える因子について自験例より検討するとともに BBS の片麻痺のバランス評価の有用性についても言及してみた。効率のよい理学療法を展開する目的から片麻痺の発症後の歩行推移から障害構造を分析し早期から歩行獲得に対しての予後予測が必要とされる反面、予測だけが先行せず、患者の能力を最大限に引き出す努力を行うことも治療者側には必要であろう。

■脳卒中片麻痺患者の歩行能力に与える諸因子(成田寿次, 他論文)

片麻痺患者の歩行能力に影響を与える身体的機能要因の中で、麻痺側運動機能、非麻痺側筋力、感覚、筋緊張、体幹機能に関して考察をまじえながらまとめた。また、近年、増加傾向にある高齢片麻痺患者の歩行能力について、筆者らの知見をまじえながら報告した。

■脳卒中片麻痺患者の歩行分析法(濱本龍哉論文)

片麻痺患者の歩行は理学療法士にとって重要なテーマである。これまでの文献から片麻痺患者の歩行における特徴は、歩行速度、歩幅、重複歩距離、立位バランス能力といった要素との関連性が述べられている。その臨床的な分析にあたっては、歩行動作そのものの観察から運動学的・運動力学的な考察を行い、さらに中枢神経系の影響を考慮した解釈につなげることが必要である。

■脳卒中片麻痺患者の歩行能力の改善に及ぼす下肢装具(平山昌男, 他論文)

脳卒中片麻痺患者に対する下肢装具の作製目的と時期、処方の方針および当センターでの取り組みなどについて、臨床で多く用いられる短下肢装具と長下肢装具を中心に述べた。

また、装具装着の有無による歩行能力について、歩行距離と心拍数から推定される酸素消費量の観点から比較し検討を加えた。

下肢装具が理学療法の治療効果と患者の利益に資するところは大きく、専門職としての的確な評価と適切な装具を作製する努力が望まれる。

■半側空間無視を有する脳卒中片麻痺患者の歩行能力(北里堅二, 他論文)

発症後長期にわたって半側空間無視の症状を呈する脳卒中片麻痺患者は、日常の実用移動能力および練習の場面での歩行練習到達レベルともに有意に低いレベルにとどまるとともに、2 群の相互間の関係より、歩行練習到達レベルが実用移動能力に汎化されにくいことがわかった 70 歳以上の年齢のもの、痴呆を有するものにも同様の傾向が見られたが、半側空間無視において最も著明であった。